

## シェイクスピアの2つの物語詩に共通する 戦争・赤と白のイメージ

吉村 征洋

### [要約]

本論文では、シェイクスピアの2つの物語詩である *Venus and Adonis* と *The Rape of Lucrece* において、赤と白と戦争のイメージが散見することを例証し、これらの共通点をエリザベス朝政治的コンテキストから考察すると、この2つの物語詩にはコード化されたメッセージが内在することを指摘している。2つの物語詩では、情欲に溺れる為政者が共通して登場するが、これらの為政者たちを表象する色として「赤と白」が使われている。赤と白の色は、戦争に関する語句と密接に関連している。こうしたイメージは、薔薇戦争を想起させる。ヴィーナス・ルクリースの赤と白の表象がエリザベス1世表象と酷似している点、2つの物語詩における情欲に溺れる為政者像とエリザベス朝晩年に恋愛ゲームにうつつをぬかしたエリザベス1世との類似点、さらには薔薇戦争との連関を考察すると、シェイクスピアは2つの物語詩における為政者の人物造型において、エリザベス1世を意識して執筆したことが想像できる。結論としては、2つの物語詩をエリザベス朝当時の政治的コンテキストから検証すると、反エリザベスイデオロギーを包含していると指摘している。

## 1. はじめに

本論文では、シェイクスピア(William Shakespeare)の2つの物語詩—*Venus and Adonis* (以下、*VA*)と*The Rape of Lucrece* (以下、*RL*)—で多用されている「赤と白」のイメージアリーに着目する。*VA*においては、赤と白のイメージアリーが、ヴィーナス(Venus)表象に多用されている。一方で、*RL*においては、ルクリース(Lucrece)を表象するのに、赤と白のイメージアリーが数多く使われている。ルネサンス期の詩や演劇において、赤と白の表象は女性の美しさや貞淑を表象するイメージとして多用されていた。それゆえ、ヴィーナスやルクリースを表象する色として、赤と白が用いられるのは、ごく一般的であったと言える。しかしシェイクスピアは、アドニス(Adonis)やタークウイン(Tarquain)を表象する際にも、赤と白のイメージアリーを用いている。シェイクスピアがアドニスやタークウインに対して、意図的に赤と白のイメージアリー表象を用いていたと仮定すると、*VA*と*RL*との間に共通項があると指摘できる。

そもそもこの赤と白のイメージアリーは、チューダー朝イングランド王家の紋章を表象する色として使われていた。ヘンリー7世(Henry VII)は薔薇戦争終結の象徴として、ランカスター家(House of Lancaster)の赤薔薇の紋章とヨーク家(House of York)の白薔薇の紋章を組み合わせて用いた。ここで注目したいのは、薔薇戦争と赤と白のイメージアリーの間接的連関である。なぜならこの赤と白のイメージアリーと戦争の間接的連関は、*VA*と*RL*の言葉の中に散見しているからである。チューダー朝王家を表象する「戦争と赤と白のイメージアリー」が、*VA*と*RL*で描かれていることにより、シェイクスピアは少なからずチューダー朝王家を意識して、2つの物語詩を執筆したと推測できる。こうしたシェイクスピアと政治に関する研究は、メアリー・アン・マクグレイル(Mary Ann McGrail)によると、近年大きく2つの領域に分けられる<sup>1</sup>。1つは、ジョナサン・ドリモア(Jonathan Dollimore)やアラン・シンフィールド(Alan Sinfield)を中心とした文化唯物論的見地から、シェイクスピア作品をルネサンス期当時の政治的コンテクストの中において解釈する。もう1つは、ハロルド・ブルーム(Harold Bloom)やハリー・ジャファ(Harry V. Jaffa)らによるもので、主に哲学的省察からシェイクスピアの作品を考察するものである。彼らは、シェイクスピアが政治的領域を超越した、どこか内省的場所に位置していると解釈する。これによってシェイクスピアは、作品の

中で政治を理解していたのと同様に、彼に政治を表象させることが可能となる。

20世紀に入ってからシェイクスピアと政治に関する問題研究を概観すると、主にシェイクスピアの歴史劇と政治に関する研究であった。ようやく20世紀後半になって、ドリモアやベルギーらによって、シェイクスピアの歴史劇以外の作品と政治に関する研究が進められるようになった。ただし、シェイクスピアの劇作品と政治の連関を考察した研究は数多く存在するが、シェイクスピアの詩作品と政治に関する研究は、未だにあまり進んでいないといえる。ピーター・ハイランド(Peter Hyland)は、劇作品が大衆向けに書かれているのに対して、詩はエリート層向けに書かれたものであることに注目する必要があるとしている。<sup>2</sup> 2つの物語詩が当時エリートであったサウサンプトン伯(Southampton)に献呈されたことを考慮すると、詩作品こそエリザベス朝政治との連関を考察する必要があるのではなかろうか。それゆえ最近になって、エリザベス朝当時の政治的・宗教的側面からVAやRLが考察されていることは注目すべきことである。リチャード・ウィルソン(Richard Wilson)は、シェイクスピアがイエズス会士で詩人のロバート・サウスウェル(Robert Southwell)と接点があったことを指摘し、2人の交流関係からシェイクスピアがカトリック的見地からVAを執筆した可能性を指摘している<sup>3</sup>。ハッドフィールドは、ヴィーナスがアドニスの死によってvirginのまま現世界から去っていくプロットが、女王エリザベスの代名詞であったvirgin queenを喚起させるものであり、この詩はエリザベス朝政権に対する何らかの政治的メッセージを包含しているのではないかと論じている<sup>4</sup>。しかしこれらの研究は、プロットベースでの研究に留まっており、詩作品の「ことば」に踏み込んだ分析があまりなされていない。詩作品のことばやイメージリーを検証して、エリザベス朝政治との連関を考察する必要がある。

本論文では、まず赤と白のイメージリーがイングランド国家において、どのように用いられていたのかを検証する。また2つの物語詩のことばを精査し、ヴィーナスとアドニス、ルクリースとタークウインを表象する赤と白のイメージリーを考察する。さらに、赤と白のイメージリーと戦争用語の連関を探る。最終的には、エリザベス朝後期の政治的コンテキストからこれらの連関が暗示するものを考察して、2つの物語詩が内包するコード化されたイデオロギーを解読する。

## 2. イングランド王室と「赤と白」

イングランドにおいて、赤と白の表象するものとして想起されるのは薔薇戦争である。薔薇戦争は1455年から1487年の間に3回に渡って、ランカスター家とヨーク家の間で繰り返された争いである<sup>5</sup>。1回目は1455年から1464年の間、セント・オールバンズ(St Albans)からタウトン(Towton)の戦いを指す。この戦いの結果、ヨーク朝エドワード4世(Edward IV)政権が誕生した。2回目は、1469年から1471年まで、ヨーク派ネヴィル家ウォリック伯(Earl of Warwick)のランカスター派への寝返りが発端となって争いが起こった。最終的には、エドワード4世が政権奪還した。3回目は1483年から1487年の間で起こった。グロスター公リチャード(Richard)が王位簒奪の後にリチャード3世(Richard III)になったが、ボズワーズの戦いにおいてリチャード3世に対する反乱軍が勝利を治め、リッチモンド伯(Earl of Richmond)がチューダー朝を設立してヘンリー7世となった。

薔薇戦争が終結すると封建貴族の勢力は衰え、ヘンリー7世を中心とした王権が伸長してきた。チューダー朝設立後、ヘンリー7世はエドワード4世の王女エリザベス(Elizabeth)と結婚して、ヨーク家とランカスター家は合体する。これによって、イングランド王家統一が実現する。ヘンリー7世は両家和解の象徴として、ランカスター派には赤薔薇の紋章、ヨーク派には白薔薇の紋章をそれぞれ採用し、赤白薔薇が混合したものをチューダー朝の記章とした<sup>6</sup>。チューダー朝はヘンリー7世が王位に就いた1485年に始まり、エリザベス1世が治世していた1603年まで続いた。赤薔薇と白薔薇の紋章は、エリザベス(Elizabeth I)が在位していた時代まで使われていた<sup>7</sup>。それゆえ赤と白の色は、一般的にイングランド王室を表象する色であり、エリザベス朝においてはエリザベスを表象する色として考えられていた。さらに、1590年代の老齢化したエリザベスは、皺やシミを隠すために厚化粧をすることで真っ白な顔になり、血色良く見せるために真っ赤な口紅を塗っていた。そのためエリザベスを描いた多くのポートレートにおいて、エリザベスの顔には赤と白の鮮やかな対照が見られる。

シェイクスピアは薔薇戦争に直接かかわったわけではないが、エドワード・ホール(Edward Hall)やラファエル・ホリンシェッド(Raphael Holinshed)らの年代記を通じて、薔薇戦争に関する情報を得ていた。また、赤薔薇と白薔薇の争いの観念は、ポリドー・ヴァージル(Polydore Virgil)の

『イギリス史』(*Anglicae Historiae Libri XXVI*) やエドワード・ホールの『ランカスター・ヨークの2貴族家の統合』(*The Union of the Two Illustrious Families of Lancaster and York*) の中にも見られた<sup>8</sup>。シェイクスピアは薔薇戦争をテーマにして、歴史劇『リチャード2世』(*Richard II*)、『リチャード3世』(*Richard III*)、『ヘンリー6世』(*Henry VI*) 3部作を執筆している。すなわち、シェイクスピアは少なからず薔薇戦争に興味をもっていたのではなからうか。こうしたシェイクスピアの薔薇戦争に対する興味が、VAやRLにおいて赤と白のイメージを多用している一つの理由として考えられる。そこで2つの物語詩で用いられている赤と白のイメージ表象が、イングランド王室、さらにはエリザベスと連関しているかを検証したい。

### 3. 『ヴィーナスとアドニス』と『ルクリースの凌辱』における赤と白

VAとRLでは、他のシェイクスピア作品と比較しても、赤と白のイメージが頻出している。ルネサンス期イングランドにおいて、多くの作家たちは赤と白による人物表象の方法を用いた。これはペトラルキズムを通じて、女性の美しさを表象するのに慣例的な方法であった。ピーター・ハイランド(Peter Hyland) は赤と白による表象に関して、大きく4つの観点から考察している<sup>9</sup>。1つ目が「神秘的見解」によるもので、慣例的な視点から赤と白をそれぞれ「キリストの血と肉体」と解釈するものである。2つ目は「政治的見解」によるもので、赤薔薇がランカスター家、白薔薇がヨーク家を表象するものとして解釈する。3つ目が「快楽主義的見解」によるもので、赤と白は女性の両側面を表象化している。つまり赤は「情熱や欲望」、白は「貞淑や純潔」を表象していると解釈する。最後は「感情的見解」によるもので、赤が「怒り」、白が「活気のなさ」を表象していると解釈する。赤と白がイングランド王家と密着に連関していたことを考慮して、本論文では政治的見解によって2つの物語詩の赤と白のイメージについて考察を進める。

VAでは、“To note the fighting conflict of her hue,/ How white and red each other did destroy!” (VA, 345-46)の一例に見られるように、赤と白の色はヴィーナスを表象するために用いられている。一方でこの赤と白による表象は、“More white and red than doves or roses are” (VA, 10)や“Adonis frets Twixt crimson shame and anger shy-pale” (VA, 76)とあるように、

アドニスを表象する場合にも用いられている。ただしヴィーナスとアドニスには、同じ red と white の色を使った表象がなされているが、それぞれ意味合いが異なっている。例えば、“*She red and hot as coals of glowing fire,/ He red for shame, but frosty in desire.*” (VA, 35-6) という詩行では、she (ヴィーナス) を表象する red が、真っ赤に燃える石炭の炎のように赤く熱い、いわばヴィーナスの「性的興奮」を表象しているのに対して、he (アドニス) を表象する red は、shame (恥ずかしさ) やヴィーナスに対する怒りを表象している。さらに、desire に焦点を当てると、ヴィーナスが情熱を燃やしている一方で、アドニスは frosty in desire、すなわちヴィーナスの情熱に対して冷めている状態である。つまりヴィーナスとアドニスは同じ red で表象されているが、その意味合いは全く対照的であるといえる。

ヴィーナスを表象する red は、他にも“*Touch but my lips with those fair lips of thine—/ Though mine be not so fair, yet are they red—*” (VA, 115-16) や “*my wax-red lips*” (VA, 516) と描写されており、いずれもアドニスとのキスを連想させ、情欲にあふれた女王像を想起させる。一方で、アドニスを表象する red は、他の箇所でも red が shame と関連して表象されている。例えば、“*Still is he sullen, still he lours and frets,/ Twixt crimson shame and anger ashy pale.*” (VA, 75-76) という詩行では、crimson(red)が shame や anger ということばと共に表象されている。すなわちアドニスを表象する赤が、恥じらいやヴィーナスに対する怒りの感情と関連している。また別の詩行にも、“*He burns with bashful shame: she with her tears / Doth quench the maiden burning of his cheek;*” (VA, 49-50) とあり、アドニスの赤 (burns) が shame と関連していることがわかる。

もう 1 つ注目すべきことは、こうした VA で描かれている赤と白のイメージが、戦争のイメージと関連している点である。VA の戦争用語によるイメージは、主にヴィーナスがアドニスを「征服」しようとするアレゴリとして使われている。しかしこうした戦争のイメージが、ヴィーナスやアドニスを表象する赤と白のイメージと関連していることを見逃してはならない。冒頭でも触れたように、赤と白のイメージが戦争のイメージと関連すると、薔薇戦争を想起させる。VA において赤と白が戦争のイメージと関連する詩行は、先ほども引用した“*To note the fighting conflict of her hue,/ How white and red each other did*

*destroy!*" (VA, 345-46)に見られる。fighting, conflict, destroy という戦争を想起させることばと white and red が連関している。さらに、

Full gently now she takes him by the hand,  
A lily *prisoned* in a gaol of snow,  
Or ivory in an *alabaster* band:  
So white a friend *engirts* so white a foe.  
This beauteous *combat*, willful and unwilling,  
Showed like two *silver* doves that sit a-billing. (VA, 361-66)

という詩行においては、lily, snow, alabaster, white, silver という白を表すことばと、prisoned, friend, engirt, foe, combat といった戦争用語によるイメージが形成されている。

こうした赤と白と戦争のイメージの連関は、RLにおいても見られる。“This silent war of *lilies and of roses* / Which TARQUIN viewed in her fair face's *field*” (RL, 71-72) では、lilies and roses が war や field という戦争用語と連関している。VA において赤と白のイメージが頻出している以上に、RL においても赤と白のイメージ表象がみられる。ナンシー・ヴィッカーズ(Nancy Vickers) の指摘によれば、「他のどのシェイクスピア作品よりも、この詩では色に関する語句が使われている」のである<sup>10</sup>。例えば、この詩の冒頭部分において、

When Collatine unwisely did not let  
To praise the clear *unmatched red and white*  
Which *triumph'd* in that sky of his delight, (RL, 10-12)

とあり、red and white と unmatched, triumph'd という戦争用語との連関が見られる。また、ルクリースのことが表象される詩行では、次のように語られている。

This heraldry in Lucrece' face was seen,  
Argued by beauty's *red*, and virtue's *white*.

Of either's colour was the other queen,  
 Proving from world's minority their right.  
 Yet their ambition makes them still to *fight*,  
     The *sov'reignty* of either being so great  
 That oft they interchange each other's seat.

This silent *war of lilies and of roses*  
 Which Tarquin viewed in her fair face's *field*  
 In their pure *ranks* his traitor eye encloses;  
 Where, lest between them both it should be killed,  
 The coward captive *vanquished* doth *yield*  
     To those two *armies* that would let him go  
     Rather than *triumph* in so false a *foe*. (RL, 64-77)

この場面は *RL* の中で、赤と白と戦争のイメージャリーが最も集約した場面といえる。“field”(72), “ranks”(73), “vanquished”, “yield”(75), “armies”(76), “triumph”(77) といった戦争をイメージさせる語彙のイメージャリーに加えて、ルクリースを表象する red, white と lilies and roses という赤と白による表象が見られる。この「赤と白の戦い」と “queen”(66) や “sov'reignty”(68) のような為政者を表す語句との関係、さらには戦争のイメージャリーを考量すると、*VA* の場合と同様に *RL* においても薔薇戦争が想起される。

タークウインがルクリースを初めて見る場面では、

When virtue bragged, beauty would blush for shame;  
 When beauty boasted blushes, in despite  
 Virtue would stain that o'er with silver white. (RL, 54-56)

と描写されており、ルクリースの容姿が blush や white で表象されている。さらに注目すべきは、blush という赤を表す語が shame と結びついている点である。マイケル・デラホイド(Michael Delahoyde) は、「この詩において(ルクリースの) 純白な皮膚が赤面するなどの「赤と白」に関するくだい繰り返しは、エリザベス女王を指した表現のように思われる」と指摘している<sup>11)</sup>。



確かにタークウインがルクリースを凌辱するために、ルクリースの寝室に忍び込み、眠っているルクリースのことを表象する語句にも“Her lily hand her rosy cheek lies under / Coz'ning the pillow of a lawful kiss;” (RL, 386-87) とあるように “lily, rosy” という「赤と白」のコントラストが鮮明に描かれている。VA においては、赤と shame の連関がアドニス表象において見られた。RL においては、同様の連関がルクリース表象に見られる。アドニスとルクリースは、それぞれヴィーナスとタークウインから情欲的に迫られる「被害者」という共通性を持っていることから、赤と shame の連関においても共通性が見られる。一方で、タークウインを表象する赤は、“But his hot heart, which fond desire doth scorch, / Puffs forth another wind that fires the torch;” (RL, 314-15) とあるように、ヴィーナスの赤と同様、「情欲」や「性的興奮」と連関していることがわかる。

赤と白のイメージと戦争用語のイメージとの連関は、この2つの物語詩だけに見られるというわけではなく、他のシェイクスピア作品においても散見する。例えば、薔薇戦争を題材に扱った『ヘンリー6世』3部作では、“The red rose and the white are on his face, / The fatal colors of our striving houses;” (Henry VI, Part III, 2.5.97-98) とあり、red and white が fatal や striving といった戦争用語と一緒に使われている。また、『エドワード3世』(King Edward III) でも、

Lo, when she *blushed*, even then did he look *pale*,  
 As if her cheeks by some enchanted power  
 Attracted had the *cherry blood* from his:  
 Anon, with reverent fear when she grew *pale*,  
 His cheeks put on their scarlet ornaments;  
 But no more like her oriental *red*,  
 Than Brick to Coral or live things to dead.  
 Why did he then thus counterfeit her looks?  
 If she did *blush*, twas tender modest shame,  
 Being in the sacred presence of a *King*;  
 If he did *blush*, twas *red* immodest shame,  
 To veil his eyes amiss, being a *king*;

If she looked *pale*, twas silly woman's fear,  
 To bear her self in presence of a *king*;  
 If he looked *pale*, it was with guilty fear,  
 To dote amiss, being a *mighty king*.  
 Then, Scottish *wars*, farewell; I fear twill prove  
 A lingering English *siege* of peevish love. (*King Edward III*, 2.1.6-23)

blush, red と pale という赤と白のイメージリーに加えて、war, mighty, siege といった戦争用語、さらには king という為政者を含んだイメージリーが形成されている。『ヘンリー6世』や『エドワード3世』はいずれも歴史劇であり、赤と白の表象や戦争のイメージリーが多用されるのは、ごく自然のことである。しかし VA と RL という歴史劇ではない物語詩において、歴史劇と同じように赤と白のイメージリーと戦争用語によるイメージリー表象が形成されていることは注目に値する。シェイクスピアは、2つの物語詩において意図的に赤と白のイメージリーと戦争用語、さらには為政者に関する用語を使うことで、コード化したメッセージを2つの物語詩に内包したと示唆できる。

#### 4. コード化されたイデオロギー

これまで考察してきたように、2つの物語詩には様々な共通点がみられる。2つの物語詩に頻出する赤と白のイメージリーと戦争用語、アドニスとルクリースを表象する red と shame の連関、ヴィーナスとタークウインを表象する red と hot desire の連関である。さらにこうした連関を踏襲して、アドニス・ルクリースという「被害者」表象とヴィーナス・タークウインという「暴君」表象の相関がうかがえる。このような2つの物語詩の共通性—赤と白、戦争、被害者と加害者—をイングランドの史実と照らし合わせてみると、赤薔薇と白薔薇が紋章に用いられた薔薇戦争が想起される。さらに、チューダー朝王家が赤薔薇と白薔薇混合の紋章を国家紋章として用いていたことから、チューダー朝王家との連関も指摘できる。その上で、チューダー朝最後の女王であるエリザベス1世表象に赤と白のイメージが用いられていることから、エリザベス朝後期に描かれた2つの物語詩とエリザベスの連関が示唆できる。ではシェイクスピアが、2つの物語詩においてこのような共通性を描いた理

由について検証する。

ヴィーナスとタークウインは、red と hot desire で表象されて、つまりは「情欲・欲情」として表象されている。ピーター・ハイランドは、貴族的権力や価値観への懐疑主義が2つの物語詩の根底にうかがえると主張している。その理由として、VA と RL において、権力者が権力の劣った者へと自分の欲望や意志を押し付けていることを指摘している<sup>12</sup>。ハイランドの言うように、VA では恋の女王であるヴィーナスが、自分より地位の低いアドニスに対して自らの情欲をぶつけている。同様に RL でも、王子タークウインが部下コラタインの妻であるルクリースに対して、自らの欲情のままルクリースを凌辱している。また「被害者」であるアドニスとルクリースは、red と shame ということばで表象されているという共通性を持っている。すなわち、こうした2つの物語詩における「加害者」「被害者」表象の共通性は、シェイクスピアが意図的に作り出したと考えても不思議はない。

また2つの物語詩における為政者ヴィーナスとタークウインは、自らの情欲を抑止できない tyrant という共通性もある。ヴィーナスはアドニスに情欲を持って迫るが、結果的にはアドニスと肉体的な関係がなかった。しかしアンソニー・モーティマー(Anthony Mortimer) は、ヴィーナスがアドニスの花の茎を折る行動(VA, 1171-6)<sup>13</sup>は、オウィディウス(Ovid)の物語にはない部分であり、隠喩的にヴィーナスがアドニスを犯したことにつながると指摘している<sup>14</sup>。モーティマーの主張を支持するならば、ヴィーナスはアドニスを間接的に凌辱したことになり、幾度もアドニスに情欲の赴くまま迫った様子から、ヴィーナスを tyrant と見なすことが可能となる。タークウインにおいては、ルクリースを自らの情欲の赴くままに無理やり凌辱していることから、言うまでもなく tyrant と見なすことができる。

こうした情欲を統御できない tyrant に対して、その権力に屈してしまうのではなく討伐すべきであるとしたのが暴君討伐論である。ここから一人の王による支配では専制支配に陥りやすいとして、派生的に republicanism が次第に広がりを見せていった。エリザベス朝後期になると republicanism への関心が有力貴族、特にエセックスサークルの人々の間で強くなった。republicanism は王制を真っ向から否定するものではなく、王制の対立軸としての思想でもなかった。あくまでも、国民の利益が最優先されるべきであるとの主張であった。それゆえ国民への利益が不平等に国王に搾取されるの

であれば、そうした為政者を *tyrant* と見なし、暴君討伐論と相まって *tyrant* を国家から討伐すべきと考えられた。

ここでヴィーナスとタークウインの被害者である、アドニスとルクリースにも目を向ける必要がある。両作品において、アドニスとルクリースが赤と *shame* で表象されている共通点に加えて、二人とも死に至るものの、*tyrant* たちの情欲に対して、最後まで *chastity* を守ろうとする共通性がうかがえる。アドニスは情欲にふけるヴィーナスに執拗なまでに迫られるが、断固としてヴィーナスの求愛に応じない。“*Fie, no more of love!*” (V4, 185) といって、ヴィーナスを拒否する姿がみられる。オウィディウスの描いたアドニスには、このように断固としてヴィーナスの要求に応じない特徴は付与されていないことから、アドニスが頑ななまでにヴィーナスを拒否する姿勢は、シェイクスピアが独自に特徴づけたと考えられる<sup>15</sup>。一方、ルクリースも情欲にふけるタークウインに対して、彼を説得しながら最後まで抵抗する。結果的にはタークウインに凌辱されるが、ルクリースは自殺することで精神面における *chastity* を保とうとしている。自らの命を絶ってまで、精神的な *chastity* を保とうとするルクリースは、アドニスと同様、頑ななまでに *tyrant* に抵抗する姿として描かれていると解釈できる。

この両者に見られる、*tyrant* に対する頑なな拒否姿勢は、政治的文脈において考慮すると、「情欲に溺れた *tyrant* に対する、断固とした拒否姿勢」を描いていると解釈できる。両者の権威者に対する拒否姿勢をエリザベス朝後期イングランドの政治的コンテクストの視座から考察すると、為政者エリザベスが情欲に溺れており、エリザベスの気まぐれな感情によって翻弄された周りの重臣たちが、それに対して頑なに拒否していると解釈できるのではなからうか。1590年代になると、エリザベスが自分の周りの若い重臣たちとの恋愛ゲームにうつつを抜かしていたことは、近年さまざまな歴史研究家が明らかにしている。フリッツ・リヴィ(Fritz Levy)は、1590年代イングランドにおける歴史的資料を詳細に読み解きながら、エリザベスが宮廷において自らのお気に入りを決める際の「気まぐれ」は、まさに *tyranny* たる姿であったことを指摘している<sup>16</sup>。エリザベスの重臣たち、特にエセックスサークルに属する人々は、タキトゥス(Cornelius Tacitus)とリプシウス(Justus Lipsius)から *tyranny* とは何かを学び、恋愛ゲームにうつつをぬかすエリザベスはまさに *tyrant* に該当すると考えていた。2つの物語詩では、薔薇戦争

を想起させるかのように赤と白と戦争のイメージが頻出し、為政者ヴィーナスとタークウイン表象に赤と白のイメージが使われている。さらに赤は *hot desire* との結びつき、ヴィーナスとタークウインという *tyrant* を表象している共通性がある。前述したように、女王エリザベスはチューダー朝最後の女王であり、薔薇戦争との連関がある上にエリザベス自身、赤と白で表象されていた。これらの共通性を考慮すると、2つの物語詩における為政者像はエリザベスを想起させるのである。シェイクスピアは、エセックスサークルに属していたとされるサウサンプトンに2つの物語詩を献上していることから、「情欲にふける為政者 *tyrant* に対して、断固とした拒否姿勢を取るべきである」というコード化したメッセージを2つの物語詩に内包したと考えられる。このように2つの物語詩のコードを読み解くと、2つの物語詩には反エリザベスイデオロギーが包含されていることが指摘できる。

## 5. 結論

シェイクスピアは2つの物語詩において、様々な共通点を描いていることが明らかになった。赤と白のイメージと戦争用語の連関は、多くの批評家が指摘している点であるが、従来、こうしたイメージは女性の美德を表象するものであると解釈されてきた。しかし2つの物語詩における他の共通点に目を向けると、2つの物語詩の中にコード化された作者のイデオロギーが解読できる。加害者であり *tyrant* であるヴィーナスとタークウインには、赤と *hot desire* の連関が表象され、被害者であるアドニスとルクリースは、赤と *shame* の連関が表象されている。またアドニスとルクリースにおいては、*tyrant* たちに対して頑ななまでに抵抗する姿がみられる。さらに2つの物語詩における赤と白のイメージと戦争用語の連関は、薔薇戦争を想起させる。チューダー朝の紋章は、赤薔薇と白薔薇によって作られており、エリザベスの治世下までチューダー朝が継続したことを考慮すると、エリザベスと赤と白、および戦争用語の連関が窺い知れる。

これらのイメージ表象に加えて、これまで考察してきたように、エリザベスは1590年代になると *tyrant* たる姿として見られていたことが、フリッツ・リヴィヤジョン・ガイ(John Guy)などの指摘によって明らかにされている。特に、お気に入りの周りの若い重臣たちと恋愛ゲームに勤しんでいた姿は、情欲に溺れた女王たる姿とエセックスサークルの人々には考えられ

た。2つの物語詩におけるアドニスとルクリースは、**tyrant**たるヴィーナスとタークゥインに対して、頑ななまでに拒否姿勢を見せている。2つの物語詩の種本となったリウィウスやオウィディウスの作品では、このような頑なな拒否姿勢は描かれていない。それゆえ、シェイクスピアは意図的にアドニスとルクリースに対して、こうした特徴を付与したと考えられる。これらを政治的文脈から解釈すると、情欲に溺れる **tyrant** に対しては、断固たる拒否姿勢を取るというコード化された強いメッセージが解読できるのである。さらにこのメッセージをエリザベス朝後期イングランドの政治的コンテクストの視座から考察すると、情欲に溺れるエリザベスに対して、断固たる拒否姿勢を示すべきという反エリザベスイデオロギーが、2つの物語詩には内包されていると指摘できる。

Notes

\* シェイクスピアの2つの物語詩からの引用は、すべて Katherine Duncan-Jones and H. R. Woundhuysen eds. *Shakespeare's Poems*. London: Thomson Learning, 2007. に依る。なお本論文中の引用箇所斜体は、筆者によるものである。それ以外のシェイクスピア作品は、*The Riverside Shakespeare* Second Edition. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton Mifflin Company, 1997. に依る。

\* 本論文は、日本学術振興会科学研究費若手研究(B) (課題番号 23720154) 「シェイクスピアの物語詩・ソネット集に内在するコード解読」による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> Mary Ann McGrail, *Tyranny in Shakespeare* (Lexington Books, 2001) 3.

<sup>2</sup> Peter Hyland, *An Introduction To Shakespeare's Poems* (Palgrave Macmillan, 2003) 4.

<sup>3</sup> Richard Wilson, "A Bloody Question: The Politics of Venus and Adonis" *Religion and the Arts* Vol. 5 (2001) 297-298 参照。

<sup>4</sup> Hadfield, *Shakespeare and Republicanism*, 135-36, 152-53 参照。

<sup>5</sup> 近年では、ランカスター家の赤ばらの紋章は実在しなかったという説もある。つまり、シェイクスピアの劇に登場した紅白の合戦は史実に基づかない、創作だったとする見方もある。

<sup>6</sup> 尾野比左夫『バラ戦争の研究』(近代文芸社, 1992) 7.

<sup>7</sup> チューダー朝の紋章は、薔薇戦争終結の象徴として作られたもので、この薔薇は両家の融合として描かれたものである。赤と白が半分ずつ塗られているはずであった。しかし、実際にはエリザベス 1 世をはじめとして英国君主はランカスター家の血筋が継いでいるため、薔薇は赤を強く塗られることが多くなっていた。

<sup>8</sup> ウォーリン, 8.

<sup>9</sup> Hyland, 95 参照。

<sup>10</sup> Nancy Vickers, 179.

<sup>11</sup> Delahoyde, 54-55 参照。

<sup>12</sup> Hyland, 6 参照。

<sup>13</sup> VA では、次のように記述されている。

She bows her head the new-sprung flower to smell,  
Comparing it to her Adonis' breath,  
And says within her bosom it shall dwell,  
Since he himself is reft from her by death.

She crops the stalk, and in the breach appears

Green-dropping sap, which compares to tears. (VA, 1171-76)

<sup>14</sup> Mortimer, 336 参照。

<sup>15</sup> キャサリン・ダンカン・ジョーンズは、VA において驚くべきこととして、ヴィーナスの肉体的なアプローチに対して、アドニスが頑なに拒否することだとしている (*Shakespeare's Poems*, 57 参照)。

<sup>16</sup> Guy, 277 参照。

Works Cited

- Delahoyde, Michael. “De Vere’s Lucrece and Romano’s *Sala di Troia*”.  
*The Oxfordian* 9 (2006), pp.50-65.
- Guy, John. *The reign of Elizabeth I: Court and culture in the last decade*.  
Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Hadfield, Andrew. *Shakespeare and Republicanism*. Cambridge:  
Cambridge UP, 2005.
- Hammer, Paul.E.J. *The Polarisation of Elizabethan Politics : The Political  
Career of Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1585-1597*. Cambridge:  
Cambridge UP, 1999.
- Hyland, Peter. *An Introduction To Shakespeare’s Poems*. New York:  
Palgrave Macmillan, 2003.
- McGrail, Mary Ann. *Tyranny in Shakespeare*. Lanham, MD:  
Lexington Books, 2001.
- Mortimer, Anthony. “The Ending of Venus and Adonis”, *English Studies*  
Vol.78, Iss.4 (1997). 334-341.
- Shakespeare, William. *Shakespeare’s Poems*. Ed. Katherine Duncan-Jones.  
London: Thomson Learning, 2007.
- . *The Riverside Shakespeare* Second Edition. Ed. G. Blakemore Evans.  
Boston: Houghton Mifflin Company, 1997.
- Vickers, Nancy J. “This Heraldry in Lucrece’s Face”, *Poetics Today* Vol. 6  
(1985). 171-184.
- Wilson, Richard. “A Bloody Question: The Politics of *Venus and Adonis*”,  
*Religion & the Arts*, Vol. 5 Iss.3 (2001), pp. 297-316.
- ウォーリン, シェルドン S. 『西欧政治思想史』尾形典男他訳 東京: 福村出版,  
1994.
- 尾野比左夫 『バラ戦争の研究』東京: 近代文芸社, 1992.



[abstract]

This article shows that Shakespeare intentionally wrote common imageries of war, the colors of red and white in his two narrative poems, *Venus and Adonis* and *The Rape of Lucrece*. Shakespeare uses the imagery of red and white for representation of Venus and Lucrece as well as Adonis and Tarquin in two narrative poems. Shakespeare uses the red with hot desire for representation of Venus and Tarquin, and they are depicted as lustful rulers. In addition, the imagery of red and white in Elizabethan England reminds us of the Tudor dynasty because red and white roses were used in a coat of arms of the Tudor dynasty as representation of the Wars of the Roses. Shakespeare might intentionally create such imagery in his poems to relate to the Tudor dynasty. Elizabeth I was the last queen of the Tudor dynasty.

In conclusion, we could regard Venus and Tarquin as Queen Elizabeth. When we consider the similarity of Adonis and Lucrece from the Elizabethan political context, we can regard them as subjects that rejected the dissolute tyrants. Thus, I can show that Shakespeare might comprehend anti-Elizabeth ideas in two of his poems.